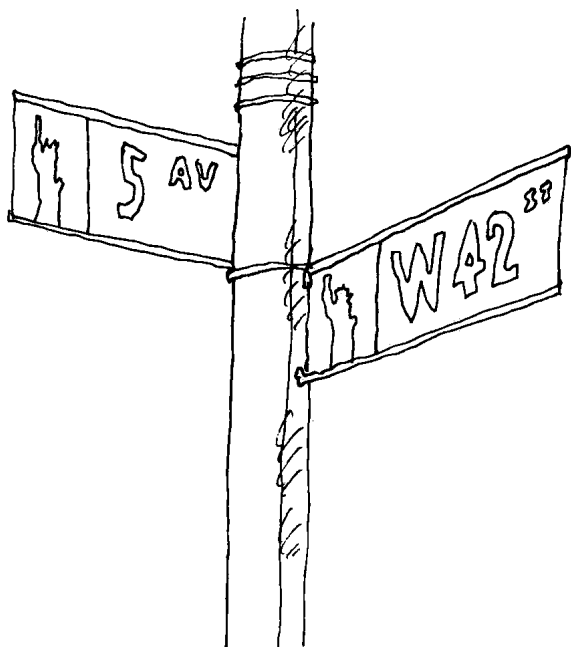


Neil Sumner

ニール・サイモン戯曲集 I

酒井洋子・鈴木周二 訳



早川書房

酒井洋子
日本女子大学英文科卒
イースト・ウェスト・センター大学院演劇科卒
演出家・翻訳家

鈴木周二
1932年生 東京外国語大学卒
早稲田大学教育学部教授
主著書「現代アメリカ演劇」(評論社)

ニール・サイモン戯曲集 I

1984年10月31日 初版第1刷発行

訳者 酒井洋子
鈴木周二
発行者 早川 清
発行所 株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町2-2
振替番号 東京6・47799
電話 東京(252) 3111 (大代表)
印刷・製本所 中央精版印刷株式会社
定価 2700円

乱丁・落丁本はお取替えいたします

ISBN4-15-203270-7 C0097

ジョーンに献ぐ――

COME BLOW YOUR HORN
BAREFOOT IN THE PARK
THE ODD COUPLE
PLAZA SUITE

by Neil Simon

Copyright

COME BLOW YOUR HORN © 1961

by Neil Simon

BAREFOOT IN THE PARK © 1964

by Ellen Enterprises, Inc.

THE ODD COUPLE © 1966

by Neil Simon

PLAZA SUITE © 1969

by Neil Simon

Introduction: Portrait of the Writer

as a Schizophrenic © 1971 by Neil Simon

First published 1984 in Japan

by HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by direct arrangement with
INTERNATIONAL AUTHORS SOCIETY, LTD.

序 文

分裂症作家の自画像

結婚して間もない頃だった。妻と私は台所でがっぷり向かい合い、ヘビー級のチャンピオンマッチも顔負けの破壊的で痛烈な言葉のパンチを浴びせ合っていた。非難の言葉が、感情的なブローが逐一狙い目を捉え、二人はぶつけあった真実の恐ろしい破壊力によるめいた。と突然、自分の傷ついた気持ともどかしさ、怒りをあらわすのにもう適当な言葉を思いつかなくなった妻が、今にして思うと唯一筋の通った行動に出た。妻はちょっと前に解凍しようとテーブルに出しておいた冷凍のヴィールチョップ(肉子牛)をつかむと私めがけて投げつけ、肉は私の右目の上を直撃した。私は啞然として身じろぎさえしなかった。啞然としたのは投げつけられたことにでも、相手の意図にでもなく、いい年をした男の自分が冷凍肉を頭にぶつけられたというばかりかしさにであった。思わずかすかな笑いが私の頬をよぎった。とたんに、怒りと敵意がすつと身内から流れ出て行き、もう争いの渦中の男ではなく、いわば観客のような傍観者として、外側に立って中をのぞき、愛し合っているが、ささやかでも意地悪い勝利を先におさめないうちは譲るのも降参するのもしやな舞台上の二人を見守っている自分に気がついた。おまけにだ。ロアルド・ダールの短篇小説ではないが、殺人の凶器に使った冷凍マトンを夕食に食べて一片の証拠も消してしまった二人の警察官のように、私もじきに

自分の結婚をこわしそうになった物を食べるということになるといふ事実。だからヴィールチョップは嫌いだ。

結婚はもちこたえ、時々以前のように、だが以前ほどはうまくいかない喧嘩をやり直しながらも順調だ。

喧嘩になると、私はまたぞろ争いの場をさりげなく脱け、安全で有利な高みに席を取ると、クリミア戦争のカーディガン卿やラグラン卿のように、戦果を気にしつつ将来の参考にとノートを取りつつ争いを見守るのである。妙な現象だ。この双頭の怪物は、状況にすっぱりのめりこんでいるかとおもうと、不意に前ぶれもなく後ずさって、経過を見守るのである。こうした現象が、作家と呼ばれる不可思議な種族に見られるのは確かであるが、喜劇作家にはそれが特に著しい。作家にとってこれを理解すること、これと生きてゆくこととは別である。半人半獣の狼人間ではないが、私は恐ろしくも論争の余地のない真実につき当った。つまり、私は過酷な運命により人格が曲げ歪められた生き物であり、感情的に巻きこまれそうになる兆しがあると、人間に最も恐れられている危険な野獣、観察者作家に変身するということだ。ロン・チャニー扮する人間にもどった怪物のローレンス・タルボのように、人間にもどった作家は変身の翌朝ひどく良心の呵責に悩むのだが、どうにもならない。呪いがかかっているのである。あたりまえの生活をしようとはするが、それも変身が始まるまでのことで、始まれば行きつくところまで行くだけだ。

私は昔からこうだったわけではない。初めは少年だった。ごくふつうの少年だった。気のいいふつうの少年だった。学校へ行き、朝食を食べ、ラジオの「ザ・シャドー」を聞き、ジョー・ディマジオに憧れ、よく映画を見、一度などチャップリンの「モダン・タイムス」で、笑い声がやかましいと映画館から叩き出された。不吉な兆しも、暗い徴しもなかった。気のいいふつうの少年だった……もつとも、目ききの目には二、三徴しが見えていたかもしれない。私はよく両親につれられて、「遠い」親戚の家へ行った。遠いといっても当時のことだ。バスで四十分の川向うのブロンクスである。この時私は、自分を見えないもののように想

像した。この世の生き物は何時間も私に話しかけなかった。時折り、大人たちがクッキーやみごとにリングをすすめてくれたが、私はこれを断わり、これ以上かまう気にならないでほしい、そうして誰も知らない無名のマントに身をかくしたいと願うのだった。何時間もたっていく。大人たちは話し、私は聞いた。話に加わるより聞いている方が、大人たちがよくわかった。帰りのバスの中でも、私は人間の目には見えないことが分った。人々は互いに話し合っていたが、私には話しかけなかった。みなお互いを見ていたが、私を見なかった。見られず、気づかれず、かまわれず、私は自分の一風変わった仕事にかかりきり、訛、髪型、磨いた靴をはいてる人、そうでない人、鼻をかむ人、ふく人、鼻をたらず人、口にするのがばかられるさまざまな癖を持った人々など、膨大な量の貴重な知識を仕込んでいった。時たま人に気づかれることがあるのだが、それはきまつて両親と一緒に年くらの少年である。これには用心しなくてはいけない。もし少年に私のしていることを勘づかれたら、ばらされてしまう。向い側の座席の人々の頭上の、リグレー・チューインガムの広告をじつと見つめて、私は邪魔者が先にバスから降りてくれないかと祈る。やった！ やつが降りていく。ぶつくりした肩と丸いお尻をこちらに向けて。運動は苦手、成績は良い、小遣いはもらっているだろう。ワァ、いいぞっ、やつめ、下着がのべつ股にくつくものだから、しきりに引く張ってるんだが、なんておかしな格好だ。やつはいただきた。おれのことを世間にばらすなんておどしてみる、どんな格好でバスを降りていったか手に取るように書いて恥をかかせてやる。家へ帰って寝、勝利の夢を見る。ザ・シャドーは知っている。

私は成長する。ここがインチ、あそこがインチ、声変りし、あごに髭が生え、思春期のもやもやを味わい、セックスを横目で見、そしてドロンドロン、大人になった。男でないまでも背の高い少年だ。こんなひどい子供を受けいれてくれるだろうか？ 私の夢、最終目標、野望は世間の人のようになること、他の人

たちのようになることだ。受けいれられ、尊敬され、目をとめてもらうことだ。懸命に、情熱的に、たゆまず仕事すればかなわぬ夢ではない。だが何の仕事だ？ 商売？ 興味なし。スポーツ？ 才能なし。医者？ 弁護士？ 技師？ 学位なし、才能なし、興味なし。

私の夢と野望は、とたんに手の届かぬものに思えてきた。どうして認められ、尊敬され、目にとめてもらえよう、見えず、観察されず、気にもかけてもらえない存在でいたら？ 二分法だ。真つ二つだ。ではこうしたらどうだろう、その二つをかけ合わせたら？ もし見られず、観察されず、気にかけれぬまま、他人のために自分が見、観察し、気にとめたことを書いたら、認められ、尊敬され、目にとめてもらえるじゃないか。

結婚して家庭ができ、子供が一人、子供が二人、ついに一人前の男になった。だが亀裂は大きくなり、溝は広がる。見えない目が観察し、見えない手が書く、が、正常な人間の営みに沿ってらくらくと両立しているわけじゃない。後にひき下がっていて、どうして夫や父親や友人や人間であり得ようか？ 事にたずさわり、まきこまれながら、どうして観察者、傍聴人でありえようか？ 二つはいぜん成長を続け、それぞれ成熟してゆき、やがて別々に離れて……分裂は完了する。二つは独自に存在し、同じ殻の中に住みながら、一個の独立した実体として機能しはじめる。怪物の誕生である。

「人間」の方は、あまりパツとしない男だ。煙草はやらす、酒はつき合い程度にたしなみ、身綺麗だが保守的に装い、彼の階層と世代の何百万の無名の人々同様、体重と後退ぎみの頭髪の生えぎわを常に気にし、ミニスカートの脚の長い娘に気を取られる。よく食料品店の店員と間違われる。食料品店の店員にだ。スポーツが好きで、子供時代の夢にふける。球を投げ、外野フライを取り、猛烈なバックハンドをきめては、心に思い描くのである。わきで葉巻をくわえて見ていたすれっからしのスポーツプロモーターが人に訊くの。

「誰だい、あの新しい子？ おれの事務所に会いに来るようになってくれ」。エーヴィスのレンタカーを利用し、いつでも速度制限を守り、読む本は古典と「ヴァラエティ」の間を絶えず変動し、穀粒入りロールパンのコンビーフサンドがあれば、三星印のフランス料理店の七コースのディナーをとばしても悔いはない。わが子の学校劇を見に行き、大事な仕事の約束があると言い訳して抜け出し、後で後悔する。時には最後まで見て、無残なできにまた後悔する。母親に親切で、義理の母には恭しく、政治的にはリベラルで、ハト派寄りで、行動的で、信じがたいほどにナイーブだ。生態学者で、樹木や草、爽やかな空気と生きとし生けるものの自由を信奉し、一度ならず、マットをはずそうとして飼犬の脇腹を蹴るのを人に見られた。子供っぽい楽道家だ。正義は常に勝ち、善人が地球を継承し、頑迷と偏見は必ず罰を受け、ニューヨーク・フットボール・ジャイアンツとメッツとニックスはそろって来シーズン首位になると思う。夢想家であって現実主義者、自分の人生に苦痛や挫折を認めないが、いざ見舞われたら受け容れる。感じやすい感情家だ。「突然炎のごとく」の古典美を賛え、「ある愛の物語」に涙を流す。人は言うだろう、ふつうの男だ。

ふっと目にとまる。声がする。道を知らない人が通り過ぎる。と、とたんに変身が起きる。おだやかな物腰の「人間」は、皮膚という保護膜の後ろにどっと駆けこんで隠れると、人に見られることなく、目という二つの鍵穴から外を覗き見る。その場に立ったまま、気取られず、気づかれず、わくわくと意地悪そうな微笑みをうかべた彼は、日々の虚しい行事を営むばかりしい人間たちの動きや振舞い、ばかげた身ぶりを見つめ、探り、詮索するのである。「あの女の身なりときたら、笑えてくるじゃないか……どうだ、あの男の哀れな喰い方は……あの二人連れの歩き方はなんとさびしいんだろう……」。作家は無節操だ！

レンズは常に調節される。肉体の反応と特徴を広く観察するためには距離を取り、深く掘り下げるときや心理的な動機づけにはぐっとクローズアップだ。おっ、待てよ。何だあれは？ 知った顔が近づいてくる。

急げ、そっぽを向け、見つかるな。大事な仕事がある。手遅れだ。見つかってしまった。口早な「ハロー、奥さんは元気？ 来週夕食でもどうです？」。行ってしまった。やすめーっ。いいやつだよ。だが、あの口髭はどうかしている。背が低いのを、あれでカバーしているつもりだ。やつが目を合わせないようにしていたのに気がついたか？ 話しながら始終くるまの流れを見ていたのに？ やつあ何を恐れてるんだ？ 何をしたんだ？ 誰か探しているのか？ いつやつは——やめろ！ いいかげんにしろ。あの短足を放つといてやれ。おまえの友人じゃないか。気に入ってるじゃないか。きちんとした男だ。やつ目の目がおまえの目を避けたからって、犯罪でも犯したことになるのか？ 話しながらくるまの流れを見るのが好きなかもしれないだろ。来週はほんとに電話して夕食を一緒にしようって言わなきゃ。

「人間」は自分の立場を主張し、節度をわきまえたみずからの振舞いに満足して、ゆったり物思いにひたる。ニックスがバルチモアに勝ち、ウィリス・リードの膝が今しばらくふんばれば——なんだ、あれは？ あそこに飼犬に話しかけている気の変な女がいる。話しかけているから気が変なのではない。答を期待しているからだ。「なぜあんなことするの、デディ？ 勝手に引く張ってっちゃだめでしょ、おいたさんねえ、ママに言いなさい、どうしてあんなことしたの？」と、デディが答えるまで満足しない。だが、答えるはずがないから女は永久に満足しない。だから満足していない。だから女は独り暮らしの老女なんだ。だから——ああ、もうっ、黙れ、黙れったら、哀れな老女はそっとしといてやれ。デディがいるだけでも運がいいんだ。おまえの詮索にはうんざりだ。誰彼なく見るのはやめろ。ほら、こんなに麗かな春の日だ。散歩でもしてボカボカお陽さまに当たたらどうだ、ほんとにもうっ。

太陽のぬくもりが身体にしみわたり、快くくつろがせてくれる。人生は素晴らしいじゃないか。自然はみごとじゃないか。神の創造物はみな本当に素晴らしいじゃないか。公園の酔キャベツ付きホットドッグとべ

プシコーラは人類最大の愉しみのひとつじゃないか。彼の愉しみは長く続かない。目の前を男と美しい女の二人連れが、ゆっくり歩いて行く。おし殺した声で、切迫したやりとりだ。愛しているがこれ以上続けられない、と男が言う。何が続けられないんだ？ 結婚生活か？ 情事か？ 二人の仕事上のコンビか？ ダンスチームか？ くそつ、うるさいバスメが、女の言葉を聞き逃した。二人は立ち止まった。女が疲れて、ベンチに坐りたがってる。おれはどうしよう？ ベンチの端に坐って、新聞を読むふりをするか？ ばか、新聞がないじゃないか。ペプシの機の内容成分を読むという手があるが、それでどれだけもつたら、二人は気づいてよそへ動きたすにきまつてる……二人だけのプライベートにはほっといてやったらどうだ？ 怪物、怪物、世間さまをほっておけ、おまえにや関係ないんだよ。

仲間の人間たちを餌食にするだけでは飽き足らず、怪物はついに自分のもうひとつのエゴである「人間」に鋒先を向け、情容赦なく解剖する。ある芝居で、彼は新妻に夫が一週間もつたいたカタブツでいたと非難させる。「そりゃあなたはきちんとしてご立派よ。酔った時だってね。レストランにつまらなさそうな顔で坐って、自分のコートを見てるんだから」。事実、彼は自分のコートを見ていた。彼は守勢に立ち弁明する。「コートを見たのは、ぼくのコートを見た人がいたからさ」。だが、怪物は引き下がらない。カタブツを一目で見分けるこいつはさらに深く切りこんで行く。怪物は若い夫について思っていることを、若妻を使って言う。「お菓子屋へ行ってツッシーロールくれてことだって言えないじゃないの。指さして女店員に言うのよね、あの茶と白の包み紙のものをくれたまえ」。「人間」の若い夫は弱々しくやり返す。怪物が若妻に襲いかかる。彼女の未熟なこと、子供じみてロマンチックなことを責めたてる。言葉はあのヴィールチョップ投げでおわった実生活の対決そのままだ。神聖なものはないのか？ 守るべき秘密はないのか？ だが怪物はしっかり観察しており、観察したことは必ずばらす。自分自身のことさえも。若妻はま

たも非難の指を振りつける。「自分ってものが分ってるの？　あなたは見てる人。世の中には見てる人とやる人がある。見てる人は、やる人がやるのを見てるだけ。そう、今夜のあなたは見てただけ、わたしがやったのよ」。このやろう、怪物め、二人は新生活を始めようとしている気持のいい若人じゃないか、ほっといてやれよ、なあ。

変身はますます頻繁に、ますます楽に、時にはそれと気づかぬうちに起きるようになる。二つをわけたはつきりした特徴はしだいに薄れてゆき、どちらがどちらとも区別がつかなくなつてゆく。誰だ、鏡の中でこっちを見ているのは？　怪物なら、なぜこれほど柔和で、無邪気で、世間に満足した顔つきなのだ？　人間なら、なぜそうまでこちらの目を不快と自嘲のこもった目で深く見入るのだ？　夜である。眠ろうと躍起になる。人間は疲れているが、作家は構想や登場人物、葛藤や状況が入り乱れて落着かない。「うるさい、このヤロ」おだやかな方がわめく。「少しは眠らせてやれ」ウツラウツラの夜が明け、朝が来ると、ツケを払うのは睡眠不足で目の下をぼつてりふくらませた「人間」だ。「怪物」はすっきり、敏捷で、行動開始の構えだ。男はぐったりした身体をひきずって台所へ行き、無理にも食物を流しこむ。「怪物」がきょうもまた生きていけるように。生きて、探り、詮索し、あげくは犠牲者の残骸をタイプしたページにひろげてみせられるように。名前を変えてはいるが犠牲者の正体は世界中に知られ、さらされ、調べあげられ、嘲笑られ、共感をもって自分と同じだと思われ、うまくいけば共に笑われることになるが、これみなすべて、間もなくけなされ、喝采され、無視され、賞められすぎることになる表題のもとに世に出てゆく――

“新作喜劇by……”

一九七二年三月一日

ニューヨーク市にて

(酒井洋子訳)

目次

序文——分裂症作家の自画像 3

カム・ブロー・ユア・ホーン 15

はだしで散歩 137

おかしな二人 267

プラザ・スイート 395

ニール・サイモンとその作品 (1) 505

